

展覧会趣旨

きらきら耀く並河七宝は、並河靖之(1845～1927年)と職工たちにより、この地で創製されました。有線七宝技法による製作が特徴で、金属を素地とする器胎の上に、図柄の輪郭線(アウトライン)を金属線で模り、ガラス質の多彩な七宝釉薬で色を挿す工程を経て、焼成、研磨します。仕上がると、金属線と釉薬の色、独創的な容(かたち)が相まって、妙なる光彩を放ち、見る人の心に美しい光を満ちわたらせました。

靖之の生家は、近江栗太郡六地蔵梅ノ木の武家・高岡家(武州川越城主松平大和守家臣)で、父・九郎左衛門は川越藩京都留守居役を勤めていました。そのため靖之は京都で誕生し、1855年(安政2)、数11歳で縁戚の並河家に養子に入り家督を継ぎ、青蓮院門跡坊官を務める家業にて、天台座主・青蓮院宮入道尊融親王(後の久邇宮朝彦親王)に仕えました。

おりしも、時代は幕末維新の激動期で、主人が被る境遇に翻弄され、先行きへの不安が絶えず、靖之は朝彦親王に仕える傍ら、当時、新産業として注目された七宝業に飛び込みました。1873年(明治6)から七宝の製造を手掛け、1878年(明治11)に専業とし、実業の世界で紆余曲折を経ながら、やがて自身の七宝業を究めて、日本の七宝を世界に冠たるものとなりました。

日本の七宝業は近世初期に遡り、江戸幕府お抱えの七宝師・平田道仁(1591～1646年)を祖とする一族が技法を相伝したため、幕末の尾張藩で梶常吉(1803～1883年)が独学で技法を開発し、尾張七宝の産地が隆盛すると、早くも海外市場を目指し、近代七宝業が胎動しました。明治維新後、産業としての将来性が期待され、京都、東京、神奈川、山梨、埼玉など、各地で着手された新興産業で、19世紀の万国博覧会を通じて、高い技術力で世界を驚かせ、外国人たちが抱く、日本の文化や歴史に対する評価と理解を一新し、世界中の人々を日本へ、京都へと誘いました。

しかし、1923年(大正12)に並河七宝が閉業した大正期末以降、七宝業全般が縮小し、国内ではいつしか忘れ去られ、再評価されるまでには、今世紀に入るのを待たねばなりません。今日、日本の古典文学や現代アート、アニメ、ゲーム、音楽など、日本文化は世界中を魅了していますが、並河七宝をはじめ明治の工芸も、日本を代表するものとなりました。

近代七宝の研究は途上にあり、並河七宝や明治の七宝業は、未だに分からないことも多くありますが、並河家に遺され、当館に受継がれた様々な資料を紐解きながら、「並河七宝の光彩一色と容の玉手箱」をテーマに、並河七宝の魅力をご紹介します。

世情は喧噪ですが、皆様には当館にて、心穏やかに観照のひと時をお過ごしください。

並河靖之七宝記念館